

# 第1回松本城・城下町写真エッセーコンテスト

優秀賞 「山岳観光都市・松本」 石井 昇



山岳観光都市・松本  
石井 昇

「まつもと、まつもと」列車が駅に到着すると流れてくる独特の抑揚あるアナウンス。松本城と並ぶ、ここ城下町松本の名物だ。この女性の声は全国あちこちの駅で聞くことができるそうだ。コンピュータで処理された自動放送である。

鉄道ファンにとって胸が躍る瞬間で、たまたなく嬉しい懐かしい声だ。いや鉄道ファンならずとも「いよいよ着いたぞ!」とワクワクさせられる。列車好きの外国人の間でも良く知られた話らしい。

今はもう走っていない「急行アルプス」。新宿を深夜に発つて明け方に松本に入る。リュックを背負った大勢の若者たちが三々五々目的の山に向かう。山男の姿が似合う街だった。ひと昔もふた昔も前の話だ。

目的を達し、疲れた身体を引きずって町へ戻り、女鳥羽川沿いの蕎麦屋で腹を満たす。城の周りを巡って帰りの列車までの時間調整だ。今では急行アルプスに代わる「ムーンライト信州」が走る。臨時列車だがシーズンの週末には熟年ハイカー達を乗せて松本にやってくる。淋しいことだが若者たちの姿は少ない。

人気歌手、氷川きよしの歌に「白雲の城」(作詞松井由利夫)というのがある。「夢まぼろしの人の世は流れる雲か城の跡」昔むすまに石垣の／榮華の昔徳べども／風雨 糸と哭くばかり」。東京出身の作詞者は何処の城をイメージしたか定かではないが、いまの筆者にとっては松本城を彷彿させるばかりだ。

城下町時代の面影をつたえる文化財が数多く残る松本だが、日本を代表する山岳観光都市としての期待は大きく、若い山男たちの姿であふれるような松本の街を夢見ている。

久しく松本を離れていないが、あらためて列車に乗り、あの到着アナウンスを車窓からまた聞いてみたい。